

ベトナムのコーヒーについて

岡山県ベトナムビジネスサポートデスク (I-GLOCAL)

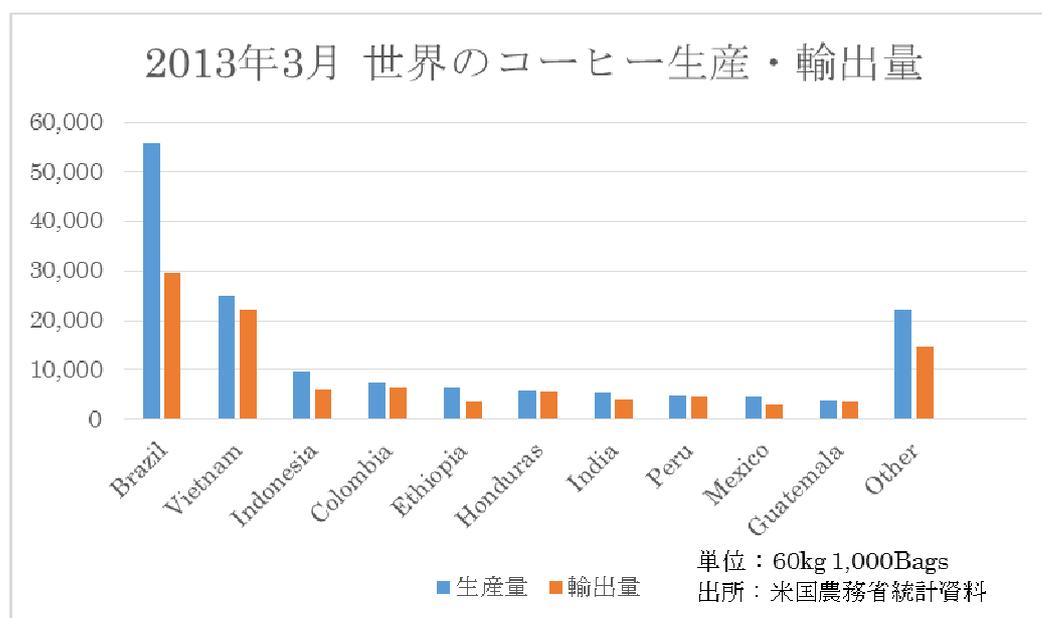
はじめに

ベトナムのコーヒー輸出高は、2012年度にブラジルを抜き、世界第1位のコーヒー輸出国となった。生産量は依然としてブラジルが首位に君臨しているとはいえ、ベトナムは世界第2位であり、コーヒー生産・輸出大国である。今回はベトナムの主力輸出品目であり、かつベトナム人の生活に欠かすことのできないコーヒーについて考察を行いたい。

◆ コーヒー生産・輸出量

下記の表は、2013年3月の資料である。この月の輸出量は僅かにブラジルに及ばなかったが、年次で見るとベトナムの輸出量がブラジルを上回り、輸出量は拮抗していると言える。

ただし、生産量に関しては常にブラジルがベトナムの2倍差で上回っており、大きく差が開いている。



◆ コーヒー輸出高

コーヒー豆は大別すると、高地栽培で香味が豊か、かつ高価なアラビカ種と、高温多湿の地でも栽培できる安価なロブスタ種に区分される。ブラジルは、アラビカ種の中では世界シェアの50%を握っており、一方ベトナムは、ロブスタ種の中では世界シェアの35%程度を握っている。しかし、コーヒー豆全体における種別ごとの生産量においては、高価なアラビカ種が世界シェアの8割を牛耳っているため、アラビカ種を中部の高原地等一部地域でしか生産できず、ロブスタ種が主力のベトナムにとっては、必然的に金額ベースでは少額となり、輸出額では世界シェアの僅か2%にしか達していない。これは、ベトナムが付加価値を向上させる生産・加工技術を持ち合わせていないことも大きく起因していることから、ベトナムのコーヒー輸出市場はまだまだ高い潜在能力があるといえる。

◆ ベトナムコーヒー

生産量の大半を輸出に回しているベトナムであるが、国内での消費も活発であり、アジア第4位のコーヒー消費国となっている。町を歩けばそこかしこにカフェが点在しており、大通りの小綺麗なコーヒー店から路地裏のコーヒー店まで規模も様々である。カフェのオープンには投資金額も少なく済み、手軽に始められることから、自宅の一階をカフェとして営業を行っている家庭も多く見受けられる。

アラビカ種のコーヒーが飲めるカフェは大規模チェーン等の一部に限定され、通常、カフェで飲むことが出来るコーヒーは、ロブスタ種のいわゆるベトナムコーヒーである。独特のフィルターを用いてゆっくりとコーヒーを淹れるのが特徴で、さっぱりとしたアラビカ種と違いロブスタ種は濃厚で苦味が強いいため、練乳や砂糖を入れて飲むことが一般的である。

ベトナムコーヒーは、日本でも近年コーヒーチェーン店等で提供されているように、アジアでも人気を博している。現地でのベトナムコーヒーの価格は、現時点においては、日本円に換算すると約50円から150円程度である。工場のワーカーの最低賃金が都市部で約1万円、日給およそ400円の物価水準からすると多少高級な嗜好品に相応しい価格設定であるが、近年では可処分所得の増加に伴い消費量も増加している。具体的には、2008年から現在まで国内消費量は約300%の成長率となっている。

◆ カフェ市場

飲食業界においては、外資規制が未だに根強く残っており、実務上外資系企業は多店舗展開が厳しいのが現状である。なお、今後は規制が緩和されるとの発表もあるが、にわかには期待しがたいであろう。また、外国からのコーヒー豆の輸入は、国内産業保護の観点から関税が高く設定されており、アラビカ種を使ったコーヒーの提供は高価格となってしまふ。実際にアラビカ種は店舗によって約200円から500円と、日本と変わらない価格設定となっている。しかし、それでも最近ではホーチミンにグローバルコーヒーチェーン店のスターバックスが1号店を出し、連日行列が出来ていることが話題となっている。ベトナム人の中にはグローバルな外資がベトナムのコーヒー市場に参入することを懸念する声も多くあがっているようではあるが、消費者は伝統的なコーヒーのみではなく、アラビカ種のコーヒーにも興味があるようである。コーヒーが大好きな国民であるため、今後も需要の増加が見込まれる。

おわりに

今回は、現在のベトナムのコーヒー産業に関して輸出及び国内消費の観点から記載を行った。原産地証明や品質に関してはまだまだ問題があるベトナムのコーヒー豆であるが、現在政府としても注力してコーヒー産業育成を進めているため、今後は改良が行われ、より付加価値の高いコーヒーが輸出されると見込まれる。貿易黒字を増やしたいベトナムとしても、コーヒーの輸出増加は大きな期待を担っているため、今後も動向を追っていきたい。